『言葉と心をつなぐ』

荒川中学校　１年　曲里　有珠

言葉は人と人の心をつなぐ大切なものです。自分の言葉が誰かの喜びにつながり、また自分にもどってきた時思いが湧いてくることを知りました。

私は、携帯電話を買ってもらってから、独り暮らしをしている祖母とメール交換をするようになって、１年２か月余りが経ちました。姉も中学２年生のころから交換していたのであまり何も考えずに始めました。ところが、祖母はそれをノートに写してくれていたのです。そのノートは、もう２冊目になっていました。びっくりしました。

そのノートを見たとき、「今日の発見」というタイトルですが、初めは、漢字を覚えるために、その日の出来事の後に、漢字１文字を書いていました。ちなみに私の初めの発見は、「ばあばが家に来てくれて、抹茶ケーキを食べられておいしかったよ。幸せ」でした。祖母は、「久しぶりに、ゆずちゃんが帰りに手をふってくれて嬉しかったよ。嬉しい。」でした。交換メールを始めた３日目は、祖父の命日でした。その日のメールに、私は、「空からじいじがばあばのこと、ちゃんと見ていますよ。空」と書いているところに、赤いペンで「ばあばには嬉しいことば」と書いてありました。それを見ると、私も嬉しくなりました。私は、自分の１日の出来事を送るだけでしたが、祖母は、「今年は暖かくなるのが早いからか、もううぐいすが、ホーホケキョと上手に鳴いてるよ。」とか、「悪口を言うと、脳の海馬が破壊されるそうだ。悪口を１回言うと、「ありがとう」を３回言わなければならないそうだ。」など、自然やテレビからの情報など、ほんとうの発見を送ってくれました。祖母の言葉から、色々な想像が広がり楽しかったです。

でも、そのうちに私はだんだん面倒になってきて、何日もメールを送りませんでした。すると、祖母から、「もうメール交換やめようか。今までありがとう。」というメールが来ました。きっと祖母は私を気遣ってそう送ってくれたのだと今は思えますが、当時の私はどんなふうに表現したらいいのか、パニックになりました。それでも続けたいと思い、「いやだ。」と送りました。祖母は私の言葉から私の気持ちを察してくれたのでしょう、それから、またメール交換が復活できました。

祖母は私が保育所のときけがで入院したらずっと付きそいをしてくれました。小学校に入学した頃、コロナの流行で学校に行けないとき、ひらがなの書き方を教えてくれました。両親が仕事でいない時、夕飯を作ってくれ、泊まってくれま

した。祖母とお風呂に入り、髪を洗ってもらい、姉と妹、私と祖母の４人で、女子だけの話をするのが楽しみでした。しかし、これらのとき、どんな話をしたかも交換メールの中身も殆どは忘れていきます。記憶はだんだん薄れてしまいます。でも、交換メール日記はずっと残り、その時と違う思いへと広がるんだと嬉しくなりました。

祖母に、メール交換をしたいと思う訳を聞いてみると、「１か月の半分くらいは誰とも話をしない日があるの。何もしないでぼんやりしていると寂しくて、せめて１日に１つくらい心に残ることを探したり、行動したりして、生きてることを大事にしたいと思うの。」と答えてくれました。

こんな祖母の気持ちは、言葉にしてもらわないと想像できませんでした。私はこれからもメール交換を続けたい。祖母がどんな１日を過ごしたか知りたいから。